

特集「対日協力政権とその周辺」

〈記録〉

ワークショップ 「浄圓寺・鳥居観音史料から見る近代日中関係 ——藤井草宣と水野梅曉関連資料」

2013.2.21

愛知大学名古屋校舎 W31・32

はじめに……趣旨説明：浄圓寺・鳥居観音の庫裏から見える 時代

三好章：愛知大学現代中国学部の三好と申します。本日の司会を担当いたします。

本日のワークショップは、「浄圓寺・鳥居観音史料から見る近代日中関係」と題しまして、豊橋の浄圓寺、埼玉県飯能の鳥居観音という二つのお寺の庫裏に所蔵されている膨大な文献史料を中心に、それをめぐる人々に話をむけて進めていきたいと考えております。この2つのお寺の史料、文献たるや近代日中関係史にとって貴重なものと言わざるを得ません。お寺ですから仏教書はもちろんですが、より本質的な仏教の在り方への真摯な問が詰まっております。ご承知の方もいらっしゃるかと思いますが、鳥居観音所蔵の扁額がテレビ東京の「なんでも鑑定団」に出され、番組の中でかなりの金額がついたことがありました。我々は仕事として史料を基本にした歴史研究に携わっておりますので、その立場から見ますと、庫裏の中の史料は、それよりもさらに値段のつけようがないほど価値の高いものであろうかと思えます。飯能の鳥居観音には玄奘三藏のお骨が祀られており、そこに水野梅曉という近代日中仏教交流に大きな足跡を残した仏僧が関わっております。そして、豊橋の浄圓寺には水野梅曉と縁の深い藤井草宣というお坊様がいらっしゃいました。本日お越し戴いたのが草宣師の息子

さんである宣丸先生でございます。鳥居観音に関わる水野梅暁も、仏教関係の仕事だけではなく、外務省の嘱託的な仕事をしたり、愛知大学の前身の一つである東亜同文書院に学んでおります。つまりお二人は単に中国を見聞したというだけではなくて、多方面での交流に関わっており、それに関連する史料が山ほどあるのが浄圓寺であり鳥居観音であるということになります。

水野梅暁・藤井草宣のお二人とも、東亜同文書院と非常に深く関係しております。ご承知の方も多いかと思いますが、水野梅暁は同文書院の1期生、そして藤井草宣は外務省給費生として同文書院に「支那語聴講生」の身分で学んでおります。従って、お二人は同文書院の先輩後輩の関係に当たり、実際に行き来しておりました。お二人については、ここ最近仏教史研究の方々が検討を進められております。また、中国近代史研究の方面からの検討もあり、接点が浮き出てまいりました。

本日のワークショップについてご説明申し上げますと、もともと愛知大学の国際問題研究所と東亜同文書院大学記念センターの両方でそれぞれ独自のプロジェクトがございました。国際問題研究所のプロジェクトは「対日協力政権とその周辺」というテーマです。そこでは、汪兆銘政権をどう評価するのか、単純な傀儡政権とだけ切り捨ててしまっているのか、和平工作の実際はどうだったのか、さらに汪兆銘政権統治下の中国社会はどのようなもので、どのように変化していったのか、日本軍やあるいは汪政権はどう関係していたのか、さらに汪政権と蒋介石のいた重慶との実際の関係、あるいは延安の共産党と繋がっていた人物のことをどのように考えたらよいのか、等々が研究の課題になってまいります。それは、単に中国大陸の汪政権だけではなくて、日本が近代において諸外国、諸地域とどのように関係してきたのかという問題があるわけです。朝鮮半島、台湾、そして、満洲国、さらには南洋群島、タイやジャワなど東南アジア。こういった諸側面をトータルに見る必要があるだろうと思います。最近では「帝国日本」という、ややジャーナリスティックに表現されることがありますが、そんな浮ついた皮相な言葉ではなくて、現在につながる世界をトータルにとらえなおす適切な言葉はないものか、ということも含めて考えていきたいと考えております。そうこう考えているうちに、豊橋の浄圓寺に行き着

いたのです。淨圓寺との出会いは、後ほど広中さんから報告がございます。そして、その淨圓寺の史料を見せて戴いて、これは大変なものだ、ということが分かりました。まず、これまでの近代史研究の文献で見ていたような人たちの名前が、庫裏の中の手紙類を始めあちこちから次々と現れてきます。汪兆銘政権関係、それ以前の維新政府関係、華北であれば新民会や臨時政府の関係者。私自身の研究に関わらせて言いますと、江文也（1910～1983、日本で学んだ作曲家）という台湾生まれの音楽家の人生を追いかけてみたこと⁽¹⁾があるのですが、藤井草宣が新民会に関係していた頃、江文也からもらったという「新民会の歌」の譜面が出てきて、びっくりしました。

ところで、愛知大学の前身というのは東亜同文書院だけではございませぬ。ご承知の方も多いと思いますが、満洲の建国大学、哈爾濱学院、北京経済学院、京城帝国大学、台北帝国大学など、戦前、海外に置かれていた日本の高等教育機関の受け皿となったのが愛知大学です。それらとの接続が如何になされたのかというのが、同文書院記念センターの研究プロジェクトの一環なのです。その研究プロジェクトで活動している湯原健一さんは、植民地間の人の動きを研究しております。台湾から直接満洲へ、あるいは朝鮮を通って満洲へ。その時、移動した人々はどのような訓練を受けたのか、官僚の「渡り」の問題はどう関わってるのか、などをやっております。さらにもう少し前の1910年代、20年代を研究している者もおります。同文書院との関係で言いますと、同文書院がどのように中国を研究し理解してきたのか、というのが研究課題なのです。これは、より広い意味では同文書院の総合的研究にもつながってきます。同文書院での研究と教育については、これまで実用性ばかりが強調されて来たことが多かったわけです。同文書院の中国研究は兵要地誌に過ぎない、ここに山がある、川がある、それを記しているに過ぎない、と批判する人もおりました。しかしながら、同文書院の中国研究はそんなものではありません。例えば、初期の

(1) 王徳威著、三好章訳『叙事詩の時代の抒情—江文也の音楽と詩作』（研文出版、2011年2月）。本書に「二〇世紀という時代の東アジアと西洋音楽」として、江文也を中心とした歴史状況を記した。

教授であった根岸佶 (1874~1971)⁽²⁾の業績からは、現在の中国社会を見る上でも参考になる視点が数多く存在しております。また、同文書院の学生は軍との関わりで通訳などにかり出されたことがあったものですから、「侵略の先兵」であったという切り捨て方で済ましている評価もあります。これに対しては、藤田佳久先生の長期にわたる研究で、単なる「侵略の先兵」「スパイ学校」などというのは一面的かつ誤った評価であり、そのような乱暴な括り方では書院の実態は理解しきれないことが実証されました。より立体的に見ますと、同文書院は日本からの学生が中心であったことはそのとおりですが、当時日本領であった台湾からも、また朝鮮総督府や満洲国政府からも学生を給費生として受け入れ、訓練して帰しております。さらに、中華学生部という組織があり、中国人の学生が同文書院にいました。その学生たちについては水谷尚子さんの非常に詳しい研究⁽³⁾「東亜同文書院に学んだ中国人」がありますので、ご覧下さい。

さて、先程ご紹介致しました愛大の二つのプロジェクトには、このように浄圓寺・鳥居観音の両方が関わっております。そしてその接点に日中戦争期を中心とした人的交流があります。その恰好の事例として、水野梅暁と藤井草宣の2人を中心に据え、その2人に関わる史料について考えていきたいと思っています。この2人に関する最近の研究としましては、辻村志のぶさんの「戦時下一布教使の肖像」⁽⁴⁾がございませう。ここには藤井草宣の話も出てまいります。また、岡村敬二さんの「水野梅暁企画にかかる名古屋覚王山日泰寺での釈迦と玄奘三蔵の遺骨対面式について」⁽⁵⁾では、名古屋の覚王山日泰寺、戦前の日暹寺に関わる話が述べられております。日泰寺には仏舎利がございませう。仏舎利の来歴は、ネパールで掘り出されたものをイギリスがタイ王室に献上して、タイ王室から日本に贈られたのが20世紀の初頭、非常に微妙な時期に微妙なかたちでお釈迦様のお骨が、最終的に名古屋に落ち着きました。今度は1942年、汪兆銘政権ができて

(2) 根岸佶『支那ギルドの研究』(斯文書院 1932) など。不二出版より『根岸佶著作集』全3巻 (2015~2016)。

(3) 水谷尚子「東亜同文書院に学んだ中国人」(『東亜同文会史論考』霞山会、1998年)。

(4) 辻村志のぶ「戦時下一布教使の肖像」(『東京大学宗教学年報』2002年)。

(5) 岡村敬二「水野梅暁企画にかかる名古屋覚王山日泰寺での釈迦と玄奘三蔵の遺骨対面式について」(研究成果報告書『戦前期中国東北部刊行日本語資料の書誌的研究』所収、2009年)。

からのことです。南京占領中の日本軍が、南京の雨花台にお稲荷さんを作ろうとして工事を始めた時に玄奘三蔵法師のお骨が入った石棺を掘り当て、それを分骨して日本の3か所に納めました。その一つが鳥居観音です。喉仏のお骨だと云うことです。そのお骨を日泰寺でお釈迦様と面会させる仲立ちをしているのが水野梅暁なのです。我々が子どもの頃から親しんでいる三蔵法師と、水野梅暁、日泰寺そしてお釈迦様が結びついたので、それにはその時期の政治関係が背景にくっきりと存在しているわけです。

今日は藤井宣丸先生と一番最後の水野明様、山本峰子様にも藤井草宣・水野梅暁のことについて多方面からお話いただくことになっております。その間に、浄圓寺・鳥居観音の史料、水野梅暁や藤井草宣をめぐる研究状況、さらに二つのお寺の庫裏の調査に関して、それに携わった方々のお話を予定しております。

藤井宣丸……父草宣と中国

三好：まず、浄圓寺の藤井宣丸先生にお願い致します。

藤井宣丸：藤井宣丸です。丁度満80歳になりました。60年以上も煙草を吸ってきましたので、声が非常に通らなくなりました。寺の住職ですから、お経を読むのも大体15年ぐらい前まではお褒めの言葉を頂くぐらいの声であつたんですけど、ここ7、8年ですっかり声が衰えてしまひまして、お聞き苦しいかと思ひます。

今日のテーマは、藤井草宣、私の父です。父草宣は明治29年生まれで、亡くなりましたのは昭和46年です。70年以上にわたる生涯のなかで中国に関係致しましたのは、大正の末から終戦までのざつと20数年間だろうと思ひます。その間に、今日のテーマにございます水野梅暁先生とのお付き合いがあつた、というよりはご指導をいただいていたのではなかつたかなと、こう思つております。

大体、父が外務省の給費生として上海の東亜同文書院へまいりますのも、水野梅暁先生が特にご推挙下さつたからではなかつたかと思ひます。それ

以前に、父は大正11年に、大谷大学卒業後間もなく、現在も続いております宗教新聞『中外日報』という新聞社にお世話になりました。そこで『中外日報』（1897年創刊）の社主であった真溪涙骨（1869～1956、『中外日報』創刊者）先生に大変お世話に相なりまして、大学を卒業するなり、真溪社長の特別のはからいで月給百円という高給で東京に出ました。東京では、父自身が宗教大学である大谷大学出身ということもあって、東京大学と関係のある先生方のお世話になりながら、報告文のような記事のようなものを書いておりました。

父は東京に行った2年間の後、すぐに外務省の給費生になったわけではありません。きっかけは東亜仏教徒会議でした。東亜仏教徒会議は特に水野先生が肝煎りとなって開いたのですが、これは当時の時代や社会を背景に、中国人との、特に中国の僧侶との関係を大事にすることを目的としておりました。東亜仏教徒会議は大正14年に開催されるのですが、父は水野梅暁氏の秘書というかたちで、その指示に従いながら会議を企画・立案をしていったようでございます。ですから、水野梅暁というお方は、単なる外務省関係からではなく、あくまでも僧侶として仏教徒として、このアジア地域が如何ようにまとまりを持ち、お互いが言葉こそ違え、仏教徒であるということ、もう少し関係を大きく緊密に広げていきたいという大きな志をお持ちになっておられるのです。そのことによって、私の父も水野梅暁先生のお世話を受けるように相なったのではなからうかと、こう考えております。

その一つの証拠は、浄圓寺の文書や史料です。先ほど三好先生がおっしゃられたように、寺の文書や史料を現在整理して頂いております。本来息子である私がやればよいことなのですが、それには次のような経緯があります。昭和20年、戦災で寺が丸焼けになりましたが、その前にお檀家のお力で疎開しておったのです。今日残っております史料には、黄檗版の初版本一切経があります。「檗版一切経」と申しますが、たくさんの版本を元に京都の黄檗さんが版本をおこしたもので、初版本が江戸の末期に近い文化文政少し前のものです。それを檀家の方が牛車で6杯、運びに来てくれたのです。さらに最後に1杯が残っておったために、私の父が庫裏の入口にあるもの全部、段ボールでも何でも木箱でもいいから積んで行けと言っ

て積み出したものが、今日話題の、それぞれの先生方に見ていただいておりまする物に相なったわけなんです。父親が亡くなりました昭和46年、豊橋の駅前のお寺から、現在地へ寺を移転致しました。その時には、親父もこんなつまらん物をいっぱい残しておつてと思ひながら段ボールへ詰めておりましたが、ただし書庫だけは作りました。

資料は書庫へ積み上げておいたんですが、数年前から、時々見せて欲しいというお方が出て参りました。例えば、先程の辻村志のぶさんです。その頃、辻村さんは筑波大学の大学院生で藤井草宣の仏教観と戦争観というテーマで修士論文を書きたいということでお見えになりました。そして、ちょうどふた夏、夏休み毎に寺に来られ、綿密に調べ、そして更に『中外日報』、『文化時報』（1924年創刊）、その他の宗教関係の新聞も全部あたられました。

そういう父親の生涯の中で、中国に関係致しましたのは、さきほど申し上げたように、大正13年位から始まって、そして昭和17年、約20年近くになります。私の父親の性格がそうであるのかどうか分かりませんが、スタートは東亜仏教徒会議、そして更にアジアの仏教徒会議を開催するためには、おそらく梅暁先生が、「中国人と付き合うのに中国語を知らにやあだめだつて」言われて、どうもそれで外務省の給費生になったのではないのでしょうか。また、一つのエピソードですが、『中日大辞典』をお作りになられた愛知大学の鈴木拓郎先生が、東亜同文書院で初めての講義をする時、一番前に座っておつたのが私の父親で、拓郎先生より私の父親のほうが年齢が上だったもんですから、「大きな学生がおるな」と思ったというんですね。それ以来、鈴木拓郎先生とのお付き合いが始まり、私も愛知大学で昭和30年から33年まで副手を務めておりましたもんですから、浄圓寺と愛知大学とは色々な関係がございました。いずれに致しましても水野梅暁先生のお陰と相成ります。まず中国語を学び、そして中国におる間に多くの中国の坊さんとの接点を持てたのです。

さて、東亜仏教徒会議でも、中国僧侶の中に湖南派と北京派という二派がございました。出席した僧侶でさえもお互いが牽制しあつて、なかなか上手く行かなかつたという苦労話も、時々耳にしました。その理由として、中国人が一番考えておるものに面子の問題があるんだというようなことを

梅曉先生がおっしゃられたと聞いております。梅曉先生と父との繋がりは、私が生まれた時分にも深かったんだろうと思いますが、昭和20年、戦災に遭った後、梅曉先生が2度淨圓寺へお出でになられました。2度目に来られた時、当時は食糧難だったからでしょうか、梅曉先生がバスケット一つ持って来て父に渡し、わしが死んだらこれをわしの遺物だと思ってくれ、形見と思って受け取ってくれとおっしゃったそうです。中には日本の、特に各省の長官クラスの方々の書画を書かれた画帖が1冊、そこに中国のお方々の書画もございました。さらに、そのバスケットの中に梅曉先生宛てのお手紙が全部で50通近く。これは今先生方にお調べ頂いているものですが、手紙が出された頃の社会情勢や政治情勢も含めてお調べ頂ければ、水野先生の業績の内の一部が更に解明されていくのではないかと思います。

いずれに致しましても、父藤井草宣という男は水野梅曉先生によって中国への繋がりをつけられました。そして、中国の坊さんとの繋がりの中で一つ特筆できるのは、鈴木大拙先生に関することです。鈴木先生は中国へ行って『支那仏教印象記』（森江書店、1934年）というのをお書きになられますが、その企画からご案内、通訳も兼ねて私の父が約2か月間付き添ったそうです。中国の天台山から始まって、五台山に至るまですべての仏蹟を回られておられるのですが、これは中国の僧侶の方々と父との繋がりを活かしたことだと思います。

もう一つ大切なことがございます。昭和16年に大東亜戦争が勃発し、17年暮れに父は日本へ引き揚げてまいりました。その時の豊橋の人口は15万程だったでしょうか、市長主催の帰朝報告会で父が約1時間話をしたそうです。それが、その晩のうちに密告され、夜中に特高に逮捕されたのです。翌18年にはもう特高裁判が終わって、禁固6か月、執行猶予3年という判決を受けました。不敬罪、こういう罪名でした。南京大虐殺について、便衣隊と称して日本軍は中国人を拉致して殺したと言ったばかりに不敬罪、そして更に流言飛語、陸軍刑法でいう。なぜ陸軍刑法が適用されるのか分かりませんが、実際にそれによって犯罪者となったのです。私の父は元々が大学在学中から若山牧水、そして倉田百三の序文を頂いて歌集を出すぐらいの文学青年だったんです。それが、『中外日報』時代から

水野梅暁先生によって、大きく中国に傾いていったのではなかろうかと、思っております。

梅暁先生の残されました業績は別と致しましても、私の父にとって水野梅暁というお方は大きな存在でもあったであろうと思います。それはここにございますように、辻村志のぶさんが書かれた中にも梅暁先生に対しての賛辞と合わせて批判的な文章も一部ございますけれども、大変に辻村さんがよく調べていただいて、よく了解できたか、こう思っております。

広中一成……日中戦争に関する浄圓寺史料

三好：ありがとうございます。それでは、広中一成さんの報告です。広中さんは愛知学院大学で鈴木智夫先生のご指導を受けまして、愛知大学大学院に進学し、中国研究科で博士学位を取得致しました。冀東政権という1935年にできた、いわゆる「傀儡政権」と呼ばれるものですが、それに関する研究をやっております。

広中：広中一成と申します。

私がなぜ浄圓寺に関わるようになったか、簡単にご説明します。私は2009年10月、『愛知大学史研究』藤井草宣に関する短い文章を書きました⁽⁶⁾。愛知大学東亜同文書院大学記念センターの研究員として、愛知大学の歴史について論考執筆の際に、愛知大学創設時に藤井草宣さんが豊橋の名士としてお手伝い頂いたことが出て参ったことがきっかけです。その時、藤井草宣のご子息宣丸先生もお元気だということでしたので、これはお目にかからねばならないと、5年程前に、初めて浄圓寺でお話を頂き、それで文章を作ったのです。2011年にも他の大学の先生と一緒に浄圓寺でお話を伺う機会があり、いろいろな偶然が重なって今日に至るわけです。

浄圓寺に古い史料があるということは以前から耳にはいたのですが、それを確認したのは2011年です。水野梅暁の手紙もあるということも聞いてはおりましたので、率直にすごいなと思ってはいたのですが、本

(6) 広中一成「第二回汎太平洋仏教青年会大会における中国代表团招致問題」(『愛知大学史研究』第3号、2009年10月)。

格的に調べ始めるようになったのはその時からです。昨2012年の夏の史料調査⁽⁷⁾では、私は藤井草宣の草稿がいっぱい詰まったダンボール2箱を担当することになりました。それを調べていると、日中戦争に関する史料が次々と出てきたものですから、これは何に使えばよいのか考えていました。それを、幾つか提案したいと思います。

前置きが長くなりましたが、藤井草宣に関する先行研究というのは、多くが仏教史関連でして、しかも専門に扱っているというのはさほど多くはありません。その中でも、先程藤井先生がご紹介なされた辻村志のぶさんの研究が最初かと思います。ここから藤井草宣の研究が本格的にスタートしたと言えるでしょう。しかし、辻村さんのものでも日中戦争と藤井草宣に関しては、私が見る限りまだ欠落している部分があると思います。史料が断片的ですので、致し方ないかも知れません。

私の今回の発表は日中戦争中の話が中心で、その中でも1937年から藤井さんが日本にお戻りになる1943年までの5、6年間です。この間の史料は、私が調査を担当したダンボール2箱分です。ほとんどが手書きの原稿と写真です。写真の中にはダンボールの中から探し出したものに加えて、お寺の仏像の横にあった衣装箱から藤井宣丸さんが出してくれたものがあります。ほとんどが日中戦争の間のものでした。少しだけ見てみますと、江朝宗(1861~1943)の写った写真があります。江朝宗は元軍閥で段祺瑞に従った人物です。盧溝橋事件後、日本軍が北京を占領すると、北京統治のために中国人を登用して新政権を作るんです。それは北京の治安維持会です。この治安維持会のリーダーを務めた人物です。その方と一緒に藤井草宣さんです。また、「中日仏教婦人大会歓迎大谷智子夫人撮影記念」と書かれた横長の写真があります。その中には大谷智子⁽⁸⁾さんが写っています。大谷智子さんとは東本願寺の法主大谷光暢師の奥様で、1938年2月に北京にお見えになり、その介添えをなさったのが藤井草宣さんです。さきほどの江朝宗といい法主夫人といい、こうした写真を見ることで藤井さんが関係した人たちが分かってくるわけです。写真の整理についてはまだなのですが、出来れば出版にこぎ着けたいと思っています。

(7) 後掲広中一成・長谷川怜「水野梅暁・藤井草宣関係史料の調査と保存」参照。

(8) 久邇宮邦彦三女、昭和天皇皇后良子妃妹。

今日メインになるのは、ノートになっていた「便箋複写簿」、つまり手紙の写しです。これが私が調べたダンボールの中から出て来ました。これは藤井草宣さんがお書きになったもので、便箋型のノートに69枚分あります。原稿用紙も3枚付いています。「便箋複写簿」ですから、自分の控えとして残したものだだろうと推測できます。このノートを翻刻、つまり活字化する作業を私が進めています、非常に見にくく、時間がかかります。そこで、文書が読める学習院大の院生長谷川怜君に助けられています。まだ、全体の3分の2位なのですが、その段階で見えてきたことをご紹介します。中味は大体4つに分かれています。

まず一つ目は、盧溝橋事件の時の難民救済についてです。北京からの難民です。北京から逃げ出すのですが、戦闘が終結してもなかなか元に戻るは大変です。そこで藤井さんは中国側の仏教徒と一緒にあって、逃げて来た難民を北京に戻す事業をしていました。そのことが書いてあります。それによると、中国側の仏教徒と協力して北京の広濟寺⁽⁹⁾など6つのお寺に事務所を置き、さらに何か所かにまた別の部署を置いて難民収容の仕事をしたそうです。これには仏教徒だけではなく、救世軍などキリスト教関係、紅社会など道教関係の人たちも同じ時にやっていたと書いてあります。なお、藤井さんはキリスト教関係者の難民収容作業のやり方を批判しています。というのは、キリスト教関係者はバスで難民を町の中に入れる、バスだと一度にたくさん入って来るので混乱する、というのです。2番目が、中国の傀儡政権と仏教との関係です。中国の傀儡政権とはさきほどの江朝宗が関わる中華民国臨時政府です。江朝宗が藤井草宣さんにその臨時政府の中に宗教管理局⁽¹⁰⁾を作って、日本人の藤井草宣が仏教以外のすべての宗派もまとめろという要請がありました。3番目は二つあります。一つは北平東本願寺の件、もう一つは通州事件の慰霊祭の事です。ここで言う「北平東本願寺」とは、北京に東本願寺北京別院ができるのですが、その前身の、要するに別院の準備段階の組織です。北京別院の研究はまだ充分ではありません。そもそも別院建立の経緯がまだよく分かっていませ

(9) 金代創建の古刹。北京市阜成門内西四。

(10) 『民國職官年表』(中華書局、1995年8月)には、中華民国臨時政府の職制に「宗教管理局」の記載なし。

ん⁽¹¹⁾。ですから、これは一次史料として貴重な物です。もう一つが東本願寺だけでなく曹洞宗など多くの宗派の方が関わった通州事件の慰霊祭についてです。通州事件とは、盧溝橋事件の2週間後に、現在は北京市内、当時は隣接する通州で、中国人の兵士が日本人200人ほどを虐殺した大変な事件です。この日本人犠牲者をどう供養するかということです。私は通州事件をテーマに論文を執筆したことがあります⁽¹²⁾が、どうやって慰霊したかについてはほとんど記録がありませんので、よく分かりませんでした。軍関係の史料では、通州事件の慰霊祭の日取りとやって来たお坊さんについて程度が簡単に書かれていただけです。ですから、この史料は通州事件がどのように收拾されていったかを調べる一次史料にもなります。最後は盧溝橋事件当時の北京での籠城についてです。これは、1937年7月27日に起こったことです。この頃日本軍が北京と天津に総攻撃を仕掛けて占領いたします。その前に「日本人居留民は、皆北京の日本領事館に退避せよ、東交民巷にある領事館に行け」という通達があって、皆逃げ出しました。藤井草宣さんも同じように逃げました。史料には領事館の中で何が繰り返されたかのか書いてあります。7月28日は、前日の27日には何をやったか。領事館に立てこもっている中で人々はどう生活していたのか書いてあります。これらは、これまでに全くと言ってよいほど調べられていません。難民について、南京事件ではかなり研究されていますが、通州事件ではどのように難民が収容されたかほとんど研究がありません。この問題を検討することで、さらに事件の詳細が見えてきます。キリスト教関係者との関係も分かります。傀儡政権と仏教との関係もこの史料からその一端が分かると思いますし、北京別院の話も同様です。通州事件の際の北京籠城も、先程述べたように、実態が見えてくるわけです。このほかにも沢山のことが分かるかも知れません。この史料をどう使っていくかが、これからの課題となりますので、当面は目録作りを進めていきたいと思ひます。以上で、私のお話を終わりにしたいと思ひます。

(11) 東本願寺北京別院に関しては、嵩満也「戦前の東・西本願寺のアジア開教」(『国際社会文化研究所紀要』第8号、2006年。龍谷大学)がある。嵩論文に依れば、東本願寺北京別院は1881年に設けられたが、1883年、中国の布教から撤退している。

(12) 広中一成「通州事件の住民問題—日本居留民保護と中国人救済—」(『軍事史学』第43巻、第3・4合併号、『日中戦争再論』、2008年3月)。

資料調査作業の実際

三好：これからは、実際に浄圓寺・鳥居観音での作業に参加した、愛知大学大学院の若手研究者を中心とした報告が続きます。まずは野口武さんが浄圓寺史料の整理についてお話しします。

野口武：愛知大学大学院中国研究科の野口武です。私は、浄圓寺史料の整理についてご報告いたします。

浄圓寺の位置ですが、豊橋駅から車で15分ほど移動した、豊川放水路のそばにあります。国道1号線から脇の農道に入り、ずっと進んで行くと立派な建物がズドンと出てきますが、そこが浄圓寺です。話は、2011年11月頃から始まります。本格的な調査の前に、2012年2月、5月と広中さんや他の大学の先生たちが事前の折衝を行い、実際に作業を行ったのは2012年7月と9月です。ということで私の報告は、その7月と9月、どのような作業していたのかということについて、かいつまんでご報告致したいと思います。

7月30日、豊橋駅に集合しまして、そこから車で浄圓寺に向かいました。まず、浄圓寺に着くと、藤井宣丸老师にご挨拶、その後ご本堂で仏様に一礼した後に最終的な打合せを行い、やっと本格的な作業に取り掛かりました。昼過ぎになっていました。7月、9月とも1泊ずつしまして、それぞれ30日、31日と、それから9月7、8日と、2日ずつに分けて作業しました。

実際どのように作業したのかということを説明していこうと思います。浄圓寺の客間2部屋を作業スペースとして利用させて頂きました。その広い方にゴザを敷き、ここにダンボールを集めました。浄圓寺の資料は、書庫の1、2階に分かれ、さらにそれぞれ2部屋に分かれていました。1階は陽があたらないので大分湿気が多く、保存状況が気になっておりましたが、そこに書棚やダンボールに入れられて保管されておりました。2階は先程の掛け軸とかももう少し貴重と思われる資料が分類されて、保管されておりました。

簡単に作業グッズについてお話しておこうかなと思います。とはいっても、どれも基本的にその辺の雑貨屋さんで買えるような道具です。これらは事

前に購入しておきました。軍手だとか、ポリ袋だとか、新聞紙です。さらに掃除グッズやウェットティッシュなども用意しました。けれども、特に重要なのは、中性紙封筒です。実際、史料の酸化状態を気にしてましたので、中性紙封筒に分類して改めて入れ直したほうがいいだろうということになり、予定外の支出になりましたが、予算の費目を変更することで、急遽愛大関係者が用意致しました。結局、封筒と箱を含め、かなりの分量になりました。

7月30日、まずは2か所の書庫にあった史料を搬出して1か所に集めるという作業が第1段階でした。実際に運ぶ段になると、それぞれ建物の奥のほうに階段があり、そこを上り下りして書庫のほうから搬出します。搬出したダンボールは32箱でした。次の作業として、大まかな分類として、1次分類としてダンボールを小分けに分類しました。藤井草宣の何らかの意図が加わった史料とその他というように、出てきた史料というものを大まかにダンボール箱に分類しました。藤井草宣の意図が加わったものとしてまず分け出しました。もちろん、この段階で中味を確認しながらの作業です。事前に草稿やスクラップなどがあるということは把握していましたので、まずそれらを見つけ出して分類します。その他に写真や先程の掛け軸などが、わあっと出てきたのです。それらを草稿、スクラップ、書簡、写真など10箱に分けました。これらが史料の中心になっていくということです。これ以外に水野梅暁の書簡が出てきたということで、一同歓声を上げました。

翌31日には、運び出したダンボールを1箱ずつ全部開け、中味をさらに分類していきました。まず、便宜上ダンボールをナンバリングしました。メモ書きにマジックで手書きして番号をふったものをダンボールに貼り付けていったのです。おおよそ何が入っていか目途が立ちそうなものを順次手書きのメモをまず貼って行きました。この後、もう一度整理し直しまして、最終的には数箱の中性紙のダンボールに番号をふりました。それから、ダンボールだけでなく史料にも埃が付着してましたので、埃を払いながら掃除しながら分類しました。開けた一つ一つの史料を事前に愛大側で購入した中性紙封筒に入れ直して、ダンボールに納めたわけです。これは2人1組で作業にあたりました。それぞれ書籍だとか草稿、スクラップ、書

簡などに分類していきました。7月の作業はそういう状況で、大まかな分類をして史料を全体で把握したということになります。

9月には、まず目録作成作業を行いました。これも事前に打ち合わせを済ませた後、データ項目を整理しました。それから一部、すでにノートパソコンに目録の枠組みは入れてありましたので、それを各自手分けしてデータを打ち込みました。目録の項目自体は史料のID、そのダンボール番号が中心になります。つまり、7月の段階で貼り付けたメモ書きを基に分類していったということになります。その他の細かい書類の分類は、草稿だとかスクラップだとか付けましたが、大まかには史料の入っていたダンボール番号を中心に分類しました。それから、入力作業の段階では藤井草宣の史料と水野梅暁の史料が混ざってしまっはまずいので、それぞれ二つに分けて作業するというところを決めました。浄圓寺には、やはり藤井草宣氏の史料がたくさんありましたので、こちらを優先に順次作業していくということにしました。この9月を皮切りに目録作成作業に入ったということです。

次の史料の写真撮影作業ですが、こちらは実際に封筒に分類した段階で写真に撮っていこうということになりました。何度もお寺に通うわけにもいきませんので、事前に写真に収めて画像に撮ったものを中心に目録付けていくという作業のために、まず第1段階として撮影に入りました。分担としては、広中さんが草稿、戦前の原稿。それから他の大学の先生がスクラップや書籍、句集、歌集ということで、順次一枚ずつデジカメで写真に撮っていきました。9月の段階では、その目録作成に入る下準備ということになります。ダンボールから出した段階では、封筒に入っていたり、紙ひもで束に括られていたり、葉書は葉書でまとめられていても年代がばらばらになっていたりしました。たくさん出てくるのはメモ類だとか新聞の切り抜きです。また何かしら草稿に関する文書でも、それぞればらばらに分類されていました。基本的にはこれらを中性紙封筒に収めて、ダンボール番号に基づいて分類、後ほどこれを中性紙のダンボールに詰め替えました。箱を組み立てて詰め替えたのがこういう状態ですね。元は古いダンボールに入ってたものを、そのまま中に入れてあります。

現在は、目録作成作業と史料のデジタル撮影作業に入っているという状

態です。私の報告としては以上、史料整理の作業内容だけについてになりました。

三好：ありがとうございました。具体的な作業で埃まみれになってやってくれた彼らがいなかったら、貴重な史料が一体どうなったか全く分からない状態でした。さて、続きまして、この史料のデジタル化をどのように進めているのかについてご報告したいと思います。この仕事の担当は、東亜同文書院大学記念センター研究員の佃隆一郎さんと暁敏さんです。佃さん、お願いします。

佃隆一郎：佃です。私と暁さんでデジタル化の作業を進めています。暁さんは、今、故郷の内モンゴルに帰省しておりますので、私一人でお話し致します。

私が代表してご報告するの昨2012年12月27日に浄圓寺に藤井草宣関連史料の撮影に暁敏さんと二人で行った時のことです。私が三好先生からこのお話をいただいたのはその年の8月、笹島のキャンパスで行われた国際シンポジウムの時でした。

私と暁さんが担当したのは歴史的な資料です。色々な史料があるということは伺っていましたが、それらをデジタルカメラで撮影してデータ保存し、確認した年代や形態などを目録に入力するという作業を行いました。12月27日の朝10時前に浄圓寺にまいりまして藤井宣丸先生とお会いし、ご案内をいただきました。すでに箱に詰められた各史料の中から、⑤と⑬の箱の中身を撮影するようにと指示されておりました。ところが、実際見てみまところ⑬が確認できませんでした。⑤は見つかったんですが、これは戦後の書簡類ということでした。もともとは戦前の書簡の撮影が目的だったのですが、⑤を私が撮影し、暁さんは戦前の上海の各種記事を取めたスクラップブック（番号③の箱）を、ここでの判断で撮影することにしました。戦前のものの撮影を優先してほしいということでしたので、スクラップブックを選びました。いずれにしても、このように分担して撮影しましたが、その日のうちに完了しませんでした。私も暁さんも出来るところまで、時間もデジタルカメラのバッテリーも切れるまで撮りまし

た。

⑤の中の箱の撮影した史料の概要について、説明致します。分量は合計236点、その他葉書も80枚ありましたので都合300点以上になります。葉書のうち、戦後のものでしたので、印刷された年賀状や挨拶状などは撮影を省略しました。撮影したものは葉書が中心でして、1955年から61年のもの、特に1955、56、59、61年の4か年がほとんどです。何故か、藤井草宣宛てのものもありました。差出人は誹諧や和歌の関係者が多く、豊橋市内とか愛知県内だけでなく、全国各地から来ておりました。やはり、仏教関連の機関や団体からの物も多くありました。原稿の執筆依頼の葉書が目につきました。私が撮影したものは、全て目録に致しましたところ です。また、暁さんがスクラップブックを撮影した目録は、内モンゴルから送ってくれました。それを私が広中さんから頂いたフォーマットに従って様式を統一しました。

注目すべき差出人としては、藤井草宣は当然として、当時の地元愛知の代議士穂積七郎、元東亜同文書院教授であり当時愛知大学教授の鈴木拓郎、地元豊橋に関わる詩人の丸山薫などがおります。また、国立国会図書館名の封筒がありましたが、その中に一括して入っていた封筒には太田勝浩さんからの物がたくさんありました。日本印度仏教会や日中仏教交流懇談会の研究会の案内などもございました。草稿には当時の豊橋の地元紙の名前が入ってるものもありました。藤井草宣宛ての書簡には、宛先の住所が豊橋市花園町浄圓寺内藤井草宣様とあります。

書簡についても葉書にしましても、内容の確認や吟味は今後の作業です。昨年12月末に行った時には、当初2、3回でなんとかなるのではと思っていたのですが、やはり甘かったようです。いずれにしましても集中的にグループでまた行くなりして、この史料の確認や撮影をきりがつくまで行うことの必要性を痛感したところです。当初承っておりました戦前の書簡ですが、それが入っているはずの箱がその時は見つかりませんでした。⑤の箱にはそういった戦前の書簡はなかったようです。昨年2012年夏の段階で史料をご覧になった方々にもそういった情報をできればここでいただきたいところです。それがやはり必要だと感じた次第です。

鳥居観音とその史料状況……川口泰斗

三好：ありがとうございます。引き続き川口泰斗さんに鳥居観音とその所蔵資料についてお願い致します。川口さんは鳥居観音にお勤めで、所蔵の文献史料なども整理なさっておりますので、実態が一番よくお分かりだと思います。西武池袋線飯能駅から、車で20分ほど走ったところに鳥居観音がございます。ホームページ等々ですすでにご承知の方も多いかと思えます。

川口泰斗：皆様、初めまして。鳥居観音職員の川口と申します。本日は諸先生方が集うこの会議で、素人の私がお伝えしようか非常に悩んだのですが、専門のほうは専門の方にお任せして、私は、別のところに焦点をあててみたいと思います。まず鳥居観音の概要をお話し、その後で水野梅暁先生と鳥居観音の関わりが一体どこにあったのかをお話したいと思えます。その上で、現在所蔵しております水野梅暁先生関連史料が鳥居観音に参った経緯に進みたいと考えます。しばらくは鳥居観音の宣伝になってしまいますが、ご了承下さい。

鳥居観音は、「白雲山鳥居観音」という名称で運営されております。埼玉県西部、飯能市上名栗にある観音信仰の寺院です。東京からは西武池袋線に乗りまして、約1時間。飯能からはバスで名栗川沿いに西へ大体40分ぐらい走ったところにあります。ここに流れる名栗川は、かつて江戸と名栗とを結ぶ重要な水路でした。名栗は関東の吉野と称され、日本有数の林業地域として栄えておりました。名栗川の上流にあたる鳥居観音は、川を隔てて向かい側に500m程の山並みが続き、その向こうに金毘羅山という山があります。その前方にも約500m前後の峰が続き、夏にはその峰から雷雲が湧き上がり、白い雲が峰をうっすらと覆うように見えます。そこから白雲山鳥居観音という名前が付けられた、というふうに聞いております。鳥居観音はそのような地勢にあり、広さは約10万坪。開祖は平沼彌太郎と申します。平沼彌太郎は観音信仰に厚かった母の意志を継ぎ、昭和15(1940)年に平沼家所有の山に祠を建て、自分で掘った小観音菩薩像を安置したことが鳥居観音の始まりとなっております。山全体が境内となっ

ており、山頂には高さ33メートルの大観音が建っております。春はつづじが山を桃色に染め、夏は灯籠流し、花火大会。秋は紅葉で山が赤くなるという風光明媚な観光名所として、また観音信仰の霊場として多くの方々が来山する場所となっております。

ここで平沼彌太郎についてご紹介します。鳥居観音の開祖である平沼彌太郎は、明治25（1892）年、埼玉県名栗村に生まれました。家業は林業、後に名栗村村長、埼玉銀行頭取、大日本山林会理事、第1回参議院議員を歴任し、財政界で波乱の多い人生を歩みました。その傍ら、彫刻家の三木宗策、澤田政廣らに師事し、多くの仏像を製作して白雲山全体に安置していったということです。先程申し上げましたように、山頂には高さ33mの救世大観音、中腹には玄奘三蔵の舍利を納めた玄奘三蔵法師霊骨慰霊塔が建っております。これは日本仏教徒を代表した水野梅暁先生によってもたらされた霊骨が、ここに分骨されたものだとおっしゃっております。また、鳥居文庫と呼ばれる収蔵庫には、県指定文化財の来迎阿弥陀如来立像の他に、水野先生の遺品など中国と関わりの多い史資料を取っております。

それでは、鳥居観音と水野梅暁先生との関わりについてお話したいと思います。水野先生は宗教家でもあり文化人でもあると、先生をご存じの方々がおっしゃるように、先生の残された足跡は非常に大きく深いものであろうと思います。また、それらの詳細が、今後明らかになっていくことを願っております。しかしながら、私は専門的に水野先生の御足跡を研究しているわけではございませんので、水野先生と鳥居観音、主に鳥居観音の創立者である平沼彌太郎との関わりについて、鳥居文庫所蔵の水野先生の史料について、その来歴に焦点を当ててお話ししたいと存じます。

昭和6（1931）年、梅暁先生は脳溢血で倒れられました。主治医の柳川先生のいらっしゃる東京の麹町病院に入院されましたが、若干の後遺症があり転地療養の必要があったそうです。柳川主治医の奥様の須美子さんが平沼彌太郎の妹であったことから、療養先に名栗が選ばれ、平沼家に預けられました。これが、平沼家と水野先生の十数年にわたる交流のきっかけとなりました。病状は3か月ほどで回復いたしました。それ以降、梅暁先生は平沼家と家族同然に親しくなされ、名栗を第二の故郷として度々平沼家を訪れては彌太郎とアジア情勢を論じ、また仏教を通じた交流を深め

ていったそうです。その頃、彌太郎は亡き母の遺志に従って観音堂を建てるべく、鳥居観音を設立しようとしていた時でした。観音様の開眼供養にあたっては、水野先生にはとりわけ得難い指導者として力を注いで頂いたと述べております。現在でも、鳥居観音の至る所に先生の筆跡が留められております。交流が続く中で戦争は激化し、東京の空襲も始まりました。麴町の梅暁先生のご自宅に危険が及ぶようになりますと、彌太郎は名栗への疎開を勧めたのですが、先生はその時、頑として疎開を拒んだということでした。彌太郎は、家財や貴重品だけでも疎開したらどうかと勧めたところ、先生はようやく応じて下さったとのこと。程なくご自宅が空襲で全焼してしまい、水野先生ご自身も鳥居観音に疎開せざるを得なかったというふうに聞き及んでおります。この時の荷物の移動に関わる部分が、今現在、鳥居観音に水野先生関連の史資料が所蔵されている経緯となります。

すでにご紹介致しましたように、戦後間もなく、水野先生は書家である松田江畔氏と共に名栗を訪れては家財などの整理をなさり、老後はこの名栗で中国文献を整理して、目録を作った上で鳥居観音に奉納したいとおっしゃっておりました。しかしながら、先生のご存命中はあまり作業がはかどらなかつたようです。先程述べた鳥居文庫は、水野先生のお志を継いで完成しましたもので、水野先生の書画、文献、書籍に平沼彌太郎作の仏像などを合わせて公開しているものです。水野先生に関するコーナーがありますが、まだ全部を展示しているわけではありません。文庫の上のほうにも倉庫があり、未整理のものも含め、収めてある状況です。展示室は上下2階に分かれております。

また、鳥居観音と水野先生との関わりを述べるにあたり、重要なことは玄奘三蔵法師の靈骨慰靈塔です。これは、平沼彌太郎の著書である『米寿までの歩み』⁽¹³⁾(昭和55年)によりますと、水野梅暁先生が平沼彌太郎に生前から依頼していたものです。昭和17(1942)年に南京で三蔵法師の靈骨が発見され、日本仏教界を代表して倉持秀峰師(1891~1972、真言宗智山派三学院住職、全日本仏教会副会長)と水野梅暁先生が中国から靈骨

(13) 以下の鳥居観音のサイトから、ダウンロード可能。<http://www.toriikannon.org/pdf/beijyumadenoayumi.pdf>

を日本に受け取られたということです。三蔵法師の霊骨は、まず埼玉県岩槻市の慈恩寺に移され、慰霊塔が建立されましたが、水野先生は、三蔵法師の霊骨塔は日本国内に1か所でも多く建立されることが日本の仏教界のために良いと考えておりました。そこで、伊豆長岡の岡部長景氏と名栗の平沼彌太郎に分骨されたのだ、とあります。水野先生は1949年、名古屋日泰寺での仏舎利奉安50年大法要の行事に参加された後、程なく埼玉慈恩寺で遷化されたのですが、その時には鳥居観音の三蔵塔はまだ完成していませんでした。このような経緯があつて、彌太郎は玄奘三蔵法師霊骨慰霊塔建立に一層奮起したわけであります。彌太郎は、水野先生の志を継ぐことは、玄奘三蔵法師の霊骨を慰めることであり、これがひいては日中文化の親善に大いに寄与できるものであると言い、鳥居観音にさらに一つ大きな魂を注ぐことになります。当時の吉田茂元総理大臣、岸信介元総理大臣、山際正道日銀総裁など、政財界約三百余名の署名と二百余名賛助者の協力を得まして、昭和35年について三蔵塔建立にこぎ着けました。このように、水野梅暁先生と鳥居観音、平沼彌太郎との結びつきは非常に強いものであると言えるでしょう。

ここで、現在所蔵している史料の概要とその状態について少しお話致したいと思います。現在、鳥居観音には水野梅暁先生に関する完全な史料目録がありません。松田江畔氏の著書『水野梅暁追懐録』（1974年）によれば、戦後20年間、主に夏、江畔氏自身が名栗において史料整理にあたり、これを終わつたと記載されております。しかしながら、書籍や書簡、文献には付箋が付いているものが一部見受けられ、また束のままになっているものもありますが、全体を通した目録というものが無いのが現状です。鳥居文庫の公開状況や所蔵状況についても、現在は全体をお見せしているわけではありません。鳥居観音の開祖である平沼彌太郎の息子は早世し、また後継の方々も文庫に関してはあまり興味が無かったということです。そのため、文庫の保管管理に関しては、彌太郎の遺志に従った次世代への継承ができていなかったのではないかと推測されます。鳥居文庫も、公開当初は多くの人でにぎわつたようで、2012年に再公開される以前の20数年間は、一般公開されておりました。資料としては、写真が鳥居文庫には数多く収蔵されており、おおよそ大体400～500枚ぐらいになると思

います。また写真の一部には、書き込みがあるものがありますが、誰が書いたのかはまだ確定していないものもあります。中には、おそらく梅暁先生が長沙で雲鶴軒を設立した時の写真ではないかと思われるものがあります。写真は、少しずつ束にしてまとまって置いておかれてある状態です。書籍のほうもまとめて確認されております。私が確認したのでは『支那時報』（支那時報社、1924年10月～1942年7月）がほぼ全巻揃っているようです。中国の仏教界の先生方と交流した際の軸もごございます。資史料に関しては、一般公開しておりますので、お近くにお寄りの際はお声掛け下さい。

さて、鳥居観音としまして、今回、この集まりに出席したのは何故なのかというところを申し上げなくてはならないでしょう。それは、鳥居観音というものを見つめ直し、後世に何を伝えていかなければならないかと考えたときに、鳥居観音に息づく水野梅暁先生のこと、また、水野先生の遺志を継いで文庫を作り、玄奘三蔵法師靈骨慰靈塔を建立した平沼彌太郎のことを思い出さずにはいられません。お二人のご遺志を継ぎまして、鳥居文庫ではこれらを管理、保管、公開し、後世に残さなければならないと考えているからであります。そうは言っても、時間が経過しまして関係諸子との連絡も途絶えがちになっています。資料を管理、運営するノウハウ、学術的な知識なども不足気味で、どのようにすることが最善な方法なのかも今のところ分からない状況ではあります。そこで今回、このような機会を得て、水野梅暁先生史料に関して何かしら道筋がつき、研究の成果を鳥居観音で展示公開できるきっかけになれば結構であると考えております。水野先生に関しましては、写真や書画や文献、書籍、書簡など数多くものが所蔵されております。また仏教史だけにとどまらず、近現代アジア史にも大きく関連するものだと思います。鳥居観音が20年間文庫を一般公開せず閉じてきたことは、水野先生の足跡を封印してしまっていたことなのではないかという思いがある一方、その反対に史料が散在しなかったがために、今後の研究に大いに役立つのではないかという複雑な心境です。最後に、水野先生という人物を幅広い視点から明らかにしていきたいと願っております。

鳥居観音と日中関係……藤谷浩悦

三好：次は東京女学館大学の藤谷浩悦先生です。藤谷先生は水野梅曉研究では先駆者である故中村義先生の薫陶を受け、湖南省の清末民国初期を研究していらっしゃいます。

藤谷浩悦：東京女学館大学の藤谷と申します。

私は、鳥居観音所蔵の水野梅曉関係の史料調査についてお話をさせていただきます。

最初に、自己紹介を兼ねて、今までの簡単な経緯みたいなものを話させていただきたいと思います。私の専門は中国近代史研究でして、特に清末民初、とりわけ清末の湖南省の政治と社会を研究しております。私は研究を始める時、亡くなられた中村義（1929～2007）先生に大変お世話になり、あちこちの史料調査に連れて行っていただきました。最初は成田山新勝寺にある柏原文太郎文書です。中村義先生と久保田文次先生がある日連絡をくださって、私が研究のイロハも何にも知らない時に、突然付いて来なさいって言われて、そこで成田山新勝寺に出掛けて史料調査をしました。研究者は最初に研究に足を踏み入れた時に、自ずとその場の研究の色が着くといわれます。いわば、研究のスタイルが身に付くんですね。これ以降も、中村義先生にはいろいろ連れて行っていただき、おかげで日本国内の史料については歩き回りながら探していくということが、自分の研究のスタイルとなりました。中村先生は懐の広い方で、私みたいな直接の学生でない者にまで眼をかけてくださり、酒席でもたびたび一緒になり、おまけにお酒の盃の持ち方までご指導いただいたりして、本当に感謝の念が尽きません。

ところで、1984年になりますが、中村義先生が鳥居観音に史料調査に行くことになり、久保田文次先生など、辛亥革命研究会の諸先生方や東京学芸大学の学生、大学院生と調査にご一緒させていただいたことがあります。飯能駅からは非常に遠く、曲がりくねった道を行ったので、バス酔いをしたのをよく覚えています。史料調査は1泊2日で、鳥居観音の施設に留めていただきました。鳥居観音に出掛けたのは、この時が最初です。た

だし、私が日本国内の水野梅暁関連文書で最初に着目したのは、外務省文書の中にある『水野梅暁清国視察一件』⁽¹⁴⁾です。なぜこの史料に着目したのかというと、それはやはり水野梅暁の報告にはちょっと他にない特徴がある、つまり当時の中国の社会に対する着眼点が鋭いという点にあります。このため、私は、水野梅暁の報告書を通して、やがて水野梅暁という人物に関心を持つようになりました。ただし、水野梅暁については、中国でも余り知られていません。私は湖南省を研究対象にしておりますので、湖南省には何回か行き、水野梅暁のいた開福寺にも3回くらい訪れています。しかし、開福寺で戴いた、お寺の概略を書いたパンフレット『開福寺簡史』⁽¹⁵⁾には、水野梅暁に関する記載はありません。『長沙文史資料』第2輯(1985年)には、戒圓「開福寺史略」という文章が載っており、水野梅暁のことも記されていますが、極めて簡単なものです。残念な気がします。

次に、これまでの水野梅暁に関する史料調査の経緯をお話します。中村義先生が1984年10月に鳥居観音を訪問致しましたが、その時は、東京学芸大学の学生など、多くの方々が調査に従事しました。皆で鳥居観音に所蔵されている書簡や書籍、写真などを見せていただいたのですが、あまりにも膨大な量で、とても1泊2日で目鼻がつくようなものではありませんでした。ただし、鳥居観音所蔵文書のだいたいの全体像がわかったという点では、収穫でした。そこで、この次はもう少し深くやりましょう、ということでこの時の調査はお開きになりました。翌1985年の春、今度は清水の松田江畔さんが水野梅暁の書簡をお持ちだということで、中村義先生が中心となって、何人かの先生方と清水を訪問されました。私はその時には参加していませんが、小林共明さんが同行されました。小林共明さんに窺ったところでは、皆で松田江畔さんの作られた、水野梅暁宛ての書簡の目録とつき合わせながら読もうとしたのですが、とにかく文字が難解で、なかなか分からないため、とりあえず何点かの書簡を写真に撮って帰ってきたということでした。この時の、松田江畔さんの作られた目録は、私も頂いております。これが書簡の目録です(シンポ会場で目録を配布)。

(14) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B03050609600、水野梅暁清国視察一件(1-6-1-38)(外務省外交史料館)。

(15) 長沙市仏教協会編『開福寺簡史』(1987年)。

この1985年の夏、辛亥革命研究会の合宿に松田江畔さんがお見えになり、水野梅暁先生との出会い、何故自分が水野先生の史料を預かるようになった経緯をお話し下さいました。松田江畔さんのお話の内容は、松田さんがまとめられた『水野梅暁追懐録』の中にある、「菩薩行を行じた人」(128～134頁)の中の話とだいたい同じ内容でした。つまり、松田江畔さんは、水野梅暁に最初に出会った時から、御光が差し添えられるように感じ、これ以降、水野梅暁に心服してご一緒に活動するようになり、やがて水野梅暁先生に信頼され、書簡を預けられるまでになったこと、何度も水野梅暁のいた鳥居観音に通ったことなどを話されました。その時、松田江畔さんは、水野梅暁関係の史料もお持ち下さいました。しかし、これ以降、中村義先生の関心が湖南汽船会社の創立者、白岩龍平に向ったこともあり、また鳥居観音から松田江畔宅へと調査対象が広がってしまったため、鳥居観音の水野梅暁関係の史料調査、整理はこれ以降ほとんど進展しませんでした。そして、2008年、中村義先生が逝去されました。中村先生らしい最期であったと窺っております。この点は、久保田文次先生が「中村義先生を偲んで」という一文にまとめておられます⁽¹⁶⁾。私もまた、鳥居観音については、記憶の片隅に残したまま、自身の研究に勤しんでいました。

ここまでは、中村義先生を中心とした今までの調査の経過です。おそらく、中村義先生の史料調査とは別の形で、別の研究者の方々が様々なかたちで鳥居観音にアプローチをしてこられたかと思いますが、私が存じ上げているのはこのような部分だけです。この間、日本の中国近代史研究、特に仏教に関する研究は、大きく進展しました。例えば、2007年には坂元ひろ子先生などが中心となり、「中国近代を読み直す——哲学・宗教・思想史——」の特集を『思想』1001号に組んでいます。また、日本史研究でも、近代日本と仏教という視角から、明治、大正以降の仏教界や開教師の活動を日本近代史の中に位置付けようという動きが、徐々に、確実に進んできました。最近の大谷光瑞に関する共同研究⁽¹⁷⁾は、これらの地道な研究の結実した素晴らしい成果であると思います。そして、2012年、一

(16) 久保田文次「中村義先生を偲んで」(『孫文研究』第44号、2008年)。

(17) 柴田幹夫編『大谷光瑞とアジア』(勉誠出版、2010年)、および白須真眞編『大谷光瑞と国際政治社会』勉誠出版、2011年。

橋大学の佐藤仁史さんと南山大学の宮原佳昭さんから、浄圓寺の史料調査の過程で水野梅暁にぶつかったこと、私が1985年に雑誌『辛亥革命研究』に中村義先生と鳥居観音に史料調査に出掛けた様子を書いていた⁽¹⁸⁾ため、話を聞きたいと連絡をいただきました。私は以前から佐藤さん、宮原さんとは懇意にさせていただいていたため、3人で鳥居観音に出向いてみようということになり、私から鳥居観音の川口泰斗さんにご連絡をし、2012年12月に3人で鳥居観音を訪問しました。鳥居観音の川口泰斗さん、平沼庸生さんは、約30年も前の中村義先生の史料調査のことをよく知らされていたようで、我々3人を歓待してください、いろいろな史料を見せて下さいました。これもまた、中村先生の御人徳だと思っています。

佐藤仁史さんや宮原佳昭さんが浙江省や江蘇省、湖南省の地域社会、教育問題の研究に取り組み、この点から廟産興学運動に着目し、やがて藤井草宣の『支那最近之宗教迫害事情』（浄圓寺、1931年）にぶつかり、更には藤井草宣の師の水野梅暁に行き着いたというのは、研究者としてはごく自然な流れであったと思います。このため、私が2012年に佐藤さん、宮原さんと一緒にさせていただいて鳥居観音の様々な史料を見せて頂いた時には、1984年に鳥居観音を訪問した段階では気付かなかった史料、特に書簡類や蔵書にも眼を向けることになりました。そして、鳥居観音及び水野梅暁の重要性を改めて再認識しました。松田江畔さんの記録では、1948年8月、すなわち終戦後3年をへて、松田江畔さんが名栗村の平沼彌太郎宅で水野梅暁さんから書簡類を受け取ったとあります。この後、杉村英治さんが、水野梅暁と非常に濃い関係にあった松崎鶴雄（1868～1949、漢学者）関係の伝記を作成するために、書簡を一部借り受け、後に返還されています。杉村英治さんは杉村勇造さんの甥です。杉村勇造さんは松崎鶴雄の娘婿にあたります。杉村英治さんは松崎鶴雄『呉月楚風』（出版科学研究所、1980年）の編者ですが、東京大学総合図書館に勤められていて、この縁で水野梅暁の書簡が東京大学法学部法政資料センターにマイクロフィルムとして収められたとも伺っています。同センターの水野梅暁の書簡目録はまだ未定稿ですが、同センターに行けば見ることが出来ます。

(18) 『辛亥革命研究』第5号（1985年）。

次に、この水野梅暁の書簡の課題についてお話をします。私が今回、皆さんにお配りした水野梅暁の書簡の目録は、松田江畔さんが作成されたものです。ここには、1985年1月の日付が入っています。中村義先生は1985年4月に松田江畔宅にお邪魔した時に、松田江畔さんからこの目録をいただいております。ただし、松田江畔さんが作られた目録では、書簡は717件にのぼります。東京大学法学部法政資料センターの未定稿の目録にある書簡は、490件です。松田江畔さんが作られた目録では、一部、書簡が重複して記載されています。このため、この差異が何なのか、今後調査を進めれば明らかになるでしょう。また、松田江畔さんの作られた目録からすると、水野梅暁の生涯のうち、前期のものは少なく、中期から後期の書簡類が中心となり、ごく一時期の書簡類であったこととなります。これからは、鳥居観音、松田江畔宅に所蔵されている書簡以外にも、眼を向ける必要があります。このように、目録自体、解決されていない部分が残ったまま、2013年に至っているのが現状です。我々研究者は自分の関心で動きがちですので、数多くある書簡類から自分にとって関心のある書簡を部分的に拜見して終わりということがしばしばあります。これは、史料保存査の在り方としては、よくないかたちであることに間違いありません。鳥居観音所蔵の書簡を分散させないようにして、なおかつ他所に保管されている書簡も手広く調査する必要があります。

すでに指摘したように、ここ数十年、近代日本と仏教という分野で、あるいは中国における日本仏教徒による布教、開教に関する研究成果がたくさん出てくるようになりました。しかし、日中関係研究では、どうしても浄土真宗、東本願寺と西本願寺のものに偏る傾向があります。他の宗派の研究もやはり必要です。特に、鶴見の総持寺、愛宕の青松寺、谷中の全生庵などは、このような意味で日中関係史上、重要な位置にあるのではないのでしょうか。特に、総持寺には黄輿の碑が建立されていて、水野梅暁のお墓もあれば、東亜同文書院初代院長の根津一のお墓もあります。浄土真宗以外の宗派にも、これから掘り下げるべき課題がかなりあります。また、東亜同文書院の卒業生のネットワークも、分析する必要があります。この点でも、水野梅暁は重要な位置を占めていると考えています。水野梅暁の書簡については、目録自体にも、先に挙げたような数字に異同が出て来る

ため、これから共同作業を通じて目録をきちんと作り、公開していく必要があると思います。外務省では、史料をデジタル化して公開できるようにしています。これには膨大な資金が必要です。ただし、資金が無くとも、きっちり目録を作り、公開するシステムを作り上げることは、可能です。これらは、書簡類だけではなく、すべての史料に言えることではないかと思えます⁽¹⁹⁾。

三好：ありがとうございます。鳥居観音が日本と中国の近代史に関わる重要な位置を占めるお寺であることがご理解頂けたかと思えます。そこにある史料がきちんとしたかたちで、多くの方が使えるように、我々の努力が少しでもお役に立てば、と念じております。

水野梅暁の身近で……水野明・山本峰子

三好：ここで、水野梅暁のご子息の明様とご息女の峰子様にお話を伺いたいと思います。明様は今年78歳、さらに峰子様は今年92歳というご高齢なのですが、それを押しておいで下さいました。ご高齢であるということは、しかし、梅暁が仕事をしている当時のことをよく覚えていらっしゃるということで、私達は今日、非常に貴重な機会を得ることができました。峰子様のお付き添いとして、峰子様のお嬢様になられます金城学院大学教授の山田和代先生にお越し頂いております。ではお話はまず、明様のほうからお伺い致しますと思います。

水野明：その前に川口さん、平沼庸夫さんたちをご紹介下さい。

川口：鳥居観音の創設者である、平沼彌太郎の孫と曾孫のお二人がここに見えております。

三好：彌太郎さんの御親族である庸夫様にもお越しいただきまして、本当に嬉しい会になりました。ありがとうございます。では、明様、よろしくお願ひ致します。

(19) 本報告後、藤谷浩悦『湖南省近代政治史研究』（汲古書院、2013年）、坂井田夕起子『誰も知らない「西遊記」』（龍溪書舎、2013年）が出版された。併せ、参照されたい。

水野明：こんにちは。私は水野明と申しまして、昭和9年6月の生まれです。東京の八丁堀で生まれました。戦争中でしたので疎開が多く、6回も小学校を変りました。その頃、私は10歳の時に水野梅暁氏の養子になりました。ですから、詳しいことはほとんど分かりません。

私は、史料としましては、若干ですが梅暁関係の写真をアルバムから抜いて持ってまいりました。これはある方から外務省の資料を送っていただいたものです。水野梅暁の法事だとか中国での写真、そういったものをファイルしてあります。倉持秀峰師と水野梅暁との写真もございます。さつき川口さんからご説明がありましたように、中国での写真、そういったものもございます。こういうような梅暁と私の祖母になります小寺ふさ、それとちょっと分かりませんが中国の老人の方でございます。こういうことについては、峰子おばさまから電話をしょっちゅういただいたり、お手紙を頂戴したりして、いささかの知識は持っております。

現在、私は新横浜駅の近くに住んでおります。梅暁のお墓は鶴見の総持寺にございます。総持寺には、先ほどもちょっと話がありましたけども、根津一先生のお墓に隣接して石原裕次郎さんのお墓もあります。私もよく水野梅暁の墓掃除に行くのですが、石原裕次郎さんのお墓はどこですかってよく聞かれます。本日は、ほんとに大変なことですが福井から高齢の90歳になられる、そして水野梅暁氏の一番よくご存じの山本峰子さんには、今日は何としてもお顔を出していただきたいということでお願いし、今日来ていただいたわけです。そんなことで、まずは金城学院大学の山田和代さんをお願いしたいと思います。

山田和代：山田でございますが、やはり母が話します。

山本峰子：私は水野梅暁の一番下の弟の娘でございます。梅暁の娘として幼い頃から東京で育ちました。梅暁は、もうご承知のような変わり者でした。私は幼い時のことはあんまりよく覚えておりませんが、娘になった頃には、お見えになった客様なんぞにお茶を出したり致しました。今、ここに書いてあるお名前の方なんかは、大方お顔だけは存じ上げております。平沼彌太郎様と水野梅暁との繋がりや、もう皆様も何遍かおっしゃって下

さいました。太平洋戦争が激しくなって、昭和18年には、もうトラック1台でもなかなか思うようになりませんでした。その時に彌太郎様が梅暁の家にトラック1台を手配して下さったのです。そして、梅暁の家にあった書簡とか写真とか、普通の方が見たら紙屑同然のものを、全部名栗の本宅へ持って行って下さいました。そのお陰で、そうしたものが戦災にあわずに今日まで残りました。これは、本当に平沼彌太郎様のお陰の賜物でございます。今、こうやって皆様方が大勢で調べていただけるようになって、どれほど平沼様も喜んでおいでになれるだろうかと思いますし、梅暁は言うに及ばずでございます。私どもまで、もありがたいことだと思っております。これからも、お調べいただいて、いくらかでも世の中の役に立つんでございましたら、大変嬉しく思います。ありがとうございます。

水野明：何か峰子さんにご質問があれば、おたずね頂きたいと思います。

三好：明様のご希望で、順を追って話すというよりは、何かご質問にお答えしたいということですので、是非聞いておきたいということがありましたら、ご自由にお願ひ致します。

馬場毅：愛知大学の馬場と申します。まず、水野梅暁さんをご家庭で中国語を話されましたでしょうか。

山本：中国人のお客様がお見えになった時などは、中国語で何か喋っておりました。私が今、もう少し漢詩とか、そういうものが読めるように勉強しておけば良かったなと今、後悔しております。

馬場：今の話は、中国語でお話になったということですけども、それは戦争中のお話でしょうか。それとも戦後のお話でしょうか。

山本：戦争中は、特に南京が落ちました時に、「もうこれ以上日本が軍を進めることは泥沼に足を突っ込むのと同じであるから、このあたりで引き揚げなければいけない」、と口を酸っぱくしてあちらこちらで言って歩い

ていたようです。家では中国語は喋ってはおりません。しかし、留学生など中国の方がよくお見えになりましたけど、その時は私には分かりませんでした。中国語で何か喋っておりました。長く中国におりましたから、中国語は自由に使えるようでした。

馬場：それはつまり、中国にいらした時のお話でしょうか。それとも、もう日本に帰られてからのことでしょうか。

山田：麴町の家での話でございます。母は中国には行っておりませんので。

馬場：分かりました。

山本：中国へは、私も行ったこともございませぬ。私が少し大きくなった後、中国からお見えになったお方のことは、知っていることはきわめて断片的なことばかりで、まとまったお話などはあまりよく分かりませぬ。私は、父親としての梅暁に可愛がって大きくしてもらいました。あまり叱られたこともありませんでした。しかしながら、うちにいた書生などにはなかなか厳しい人で、かなり怖い人だったようです。

馬場：もう一つお伺い致したいのですが、特に梅暁さんのことで印象に残っているお話はございますか。

山本：私は昭和18年頃、水野梅暁の友人で、長沙で山本洋行という貿易会社をやっていた方がいらっしゃいました。その方の息子を梅暁は、娘の私の配偶者としてもらいたいと申し込んだそうです。そうしましたら、「養子はお断りだ、お前の娘を貰うのならよろしい」と言われたそうです。そうしましたら、梅暁は変わり者ですから、「そんなら貰ってくれ」と言うことで、急遽、私は山本の家に嫁入りをすることになったのです。その時に籍が抜けないので、この水野、隣にいる明さんを急遽養子にたてて、この方も大変ご迷惑をおかけしたと思いますけども。お陰様で鶴見の総持寺のお墓もこの明さんがずっと管理していただいておりますので、私はたま

にお参りに行くだけで、何にもしておりません。山本洋行をやっております私の舅は、山本勇吉と言いまして、長沙で貿易をやっておりましたが、その内に昭和の初期に排日運動が起こって、焼打ちにあい、それでやめて引き揚げてまいりました。福井の人でしたので、それからはもう中国へ行くこともなく、福井におりました。私の夫は、県立福井中学（現、福井県立藤島高等学校）を出て、京都帝国大学医学部を卒業しました。当時は軍人にならないとどうにもならない時代でしたので、軍医中尉として出征しておりました。そんな中、昭和19年ににわかに結婚話がでたわけです。私は部隊にも二度ほど面会に行ったりしました。水野も私も戦災ににあい、それからは気の毒に水野はあちらこちらのお寺に寄宿したりなどして、亡くなりました。病気の時は私はこの子(山田和代)が3歳の時に連れて行って看病したのですが、ひと月ほどして亡くなりました。

馬場：どうもありがとうございました。

水野克彦⁽²⁰⁾：私も「水野」と申します。5年ほど前から「水野氏史研究会」というのをやっております、その関係でちょっとお尋ねしたいと思いますが、水野梅曉は旧福山藩主の四男としてお生まれになったということだそうですね。

山本：そのことは、聞いているだけです。

水野克彦：ですから、以前は「水野」さんではなかったということなんでしょうか。

山本：水野梅曉は広島県の福山の藩士、金谷俊三の四男として生まれたようです。幼い時に水野桂巖というお寺の家へ養子にいったようですね。そのように書いてございます。

(20) 水野克彦氏は、2015年5月30日、永眠なさいました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

水野克彦：元々は「金谷」様なのですね。そして、ご本名は「ばいぎょう」さんとお呼びするのでよろしいのでしょうか。

水野明：はい、「ばいぎょう」です。

水野克彦：はい。分かりました。ありがとうございます。

山本：幼い時は、「善吉」と書いていたようです。善良の善っていう字に吉、で「善吉」でした。

水野克彦：どうもすみません。ありがとうございました。

広中一成：広中と申します。一つだけご質問したいと思います。山本峰子さんは、水野梅暁さんと藤井草宣さんとの関係について何かご存知でしょうか。

山本：何遍かお目にはかかって、お顔はよく存じ上げております。しかし、どういう用件で水野を訪ねてお出でになったのか、そんなことは私どもの知る限りでございませんので、存じ上げません。

広中：もう一つ。山本さんは藤井草宣さんをご覧になって、どのような印象を持たれましたか。

山本：よく分かりませんが、背のすわりと高いお方だったと記憶しております。私が山本と結婚する時に、お祝いにハンドバックか何かを頂戴したことは覚えております。

三好：どうもありがとうございました。この後、史料状況、及び藤井草宣と水野梅暁との関係などを含めまして、質疑と討論の時間として、6時近くまで皆様とお話できれば、と思っております。

休憩10分

質疑・討論

三好：最初にまず、本日も報告いただいた方々に、語り残し等をお願いしたいと思います。

広中一成：先程、大体はお話したのですが、その時、落としてしまった話を紹介しておきたいと思います。仏教などの宗教関連の研究者の方は当然ご存じでしょうが、『中外日報』についてです。先程ご報告申し上げた際、ご紹介したノートの日付と『中外日報』の記事とを比較すると極めてよく合っています。要は、そのノートと『中外日報』の記事を突合せることで、より具体的なところが分かってくるということです。ですから、この藤井草宣の研究、水野梅暁の場合もそうですが、まずは『中外日報』をしっかりと見る。見落としている部分の再確認も含めて、基本文献として使っていかなければならないと思います。

佃隆一郎：私の場合、この淨圓寺の史料を確認したり整理したりする作業に、後から加わっておりますので、今までまだ分からないところがたくさんありました。今回、前からお仕事を進めていらした皆さんとお会いすることが出来ましたので、この機会を何とか活かして皆さんとご一緒に何とか進めていきたいと改めて感じました。

藤谷浩悦：私は、今日は水野梅暁の史料についてお話をさせていただきました。やはり中国近代史だけではなく、日本近代史においても水野梅暁氏の占める位置は、非常に重要であると思います。これをきっかけに水野梅暁研究が、例えば大谷光瑞研究を総合研究でやったように、組織立てて研究していくきっかけになれば良いなと思うのが一つです。もう一つは、やはり現在、鳥居観音のほうにあれだけのコレクションがあるわけですから、それを散逸させないかたちで公開できるように、何とか皆で力を合わせながら知恵を絞っていききたいと、非常に強く感じます。

川口泰斗：このような機会をいただきまして本当にありがとうございます。また、きっかけとしまして私も期待するところもありますので、是非これからもよろしくお願ひしたいと思います。ありがとうございます。

藤井宣丸：私も自分の父親が何故中国にあそこまでのめり込んでいったのか。そのスタートは、今日まだお話しせずにおりました。それは、おそらくは大分県出身の方で私共と同じ宗派の小栗栖香頂（1831～1905、浄土真宗本願寺派僧侶、初期中国布教者）だと考えられます。小栗栖さんの中国開教に引き続いて、父草宣が自分の自身の進路を決めるに際に、梅暁さんが大変に大きな力を与えて下さったんじゃないかなろうか、こんなふうに感じております。小栗栖香頂につきましては、私共浄土真宗のほうで色々研究もいたしております。私も一昨年、丁度1週間程、大分のお寺へ法話にまいりましたついでに、小栗栖先生のお寺である妙正寺へまいりまして、そこにある経藏へ入らしていただいた訳です。

明治の初め（明治6年、1873年）に小栗栖香頂さんは自ら単身で中国へ渡るわけです。自らの意思で中国へお渡りになり、言葉を覚え、それによって中国のお坊さん達との接点を作って行かれました。このあたりが、おそらく父草宣の進路に大きな意味を与えたんだらうかと、考えております。私共浄土真宗におきます海外開教では、この小栗栖香頂が先鞭をつけられたお方です。私が中国史を専攻したものですから、父は、やっぱり言葉をもう少し覚えとけよと、よく申しておりました。あえて私は中国語はやらずに済ましちゃったものですので、誠に申し訳なかったんです。同文書院に行って、同文書院で学んでいく中で、向こう中国のお坊さん達との接点を持っていったのも、そういう背景があったと思います。昭和27年、世界仏教徒会議を戦後初めて日本でやった時⁽²¹⁾、中国から趙樸初師（1907～2000、中国仏教協会会長、中日友好協会副会長）がお見えになりました。京都の東本願寺の涉成園⁽²²⁾、つまり枳殻邸で園遊会が行われまして、そこに私も呼ばれました。私のことを紹介していただくと、趙樸初さんが、私

(21) この時は、築地本願寺で開催。

(22) 東本願寺の飛地境内地。1641年、徳川家光の寄進による。「枳殻邸」は周囲に枳殻（カラタチ）を配したことによる涉成園の別称。

に向かって「君の親父とは朋友だ」と日本語で言われたのが、今だにまざまざと記憶の中に残っております。趙樸初さんは、日本語がかなりできるんですよ。その後、初めて中国に行った時も趙樸初さんにお会いしました。趙樸初さんは、東本願寺上海別院の裏に孤児院がございましたが、そこで本ばかり読んどりました。しかし、趙樸初さんという方が、戦後の中国共産党政権下での仏教信者として頑張っておられた結果、中国仏教を潰さずにすんだ。そういう意味では、趙樸初さんの力があつたのかとも考えております。共産党政権下での廃仏的な動きの中で、浄土宗系統が残つたというには、そういう意味があつたのではなかろうかな、とこんなふうに思っております。

梅曉先生につきましては、私は戦後2度、淨圓寺にお越しいただいた時にお会いしたことがあるだけです。昭和21、22年というお亡くなりになる直前でした。私はちょうど中学生でしたし、あまりお世話することもなく、焼け跡の掘立小屋住まいでした。お帰りに、何かお土産を差し上げたいと父親が申した時に、「米をくれ」とおっしゃられただけは、非常に強く記憶に残っております。私の父親が檀家の家へすぐ電話を掛けて、何升かのお米をお持ちいただきました。食料の移動が禁じられつつあった時代ですから、梅曉先生にお米をどうやって持たせようかって言うので、だいぶ苦勞なされたようです。東海道線の中でも没収されるっていうような事が、再々起きておりました。梅曉先生は「米をくれ」っておっしゃられたのですが、私も当時のお世話になった先生に米を差し上げるだけで済むのかなと、こう思った記憶がございます。

三好：ありがとうございます。それでは、引き続きまして、本日ご参加下さった方からのご質問などをお受けしたいと思います。

まず、長谷川さん、どうぞ。

長谷川怜：学習院大学の大学院博士課程の長谷川と申します。よろしくお願ひします。最近、広中さんを通じてご紹介いただき、水野梅曉先生の史料と一緒に読ませていただいております。自筆文書は、書いた人の癖によって全然読めない場合もありますが、皆で一生懸命繰り返し読んでいますと

徐々に読めてくるんです。最初は、字が読めなくても、よく言われることが、「読むな漢字を」ということです。その分野に特化して研究している人が史料を扱っていると、史料を書いた人が本当に空から降りてくるような感じがして、ほんとに漢字が読めるようになってくるのです。読んでるうちにそうなるんです。やはり、そのときに現場にいた人が書いたものですから、非常に臨場感に溢れていて、読むたびに本当に新しい驚きに満ちてきて、皆で「お一つ」と言いながら読んでしまいます。特に広中さんたちと藤井先生の日記に関して読む時などは、時間は忘れて何時間も、5、6時間ぐらい読み続けてしまうことがしばしばです。水野梅暁の史料は、その分野について深く研究している広中さんでも初めて見たということが次から次へと出てくるほど、本当に素晴らしいものですので、これからももっと一生懸命拘わっていきたいと思います。

三好：馬場先生、どうぞ。

馬場毅：藤井草宣さん関係の本に『支那最近之宗教迫害事情』があります。私は、1928年に国民政府が進めていた迷信打破運動に対して民衆がどう反応したのかということについて、この時期の中国の南方の大刀会を中心に論文を書いたことがあります。私が驚いたのは、草宣がこれと同時に国民政府が進めていた宗教迫害問題に注目し、これをまとめているところです。この『支那最近之宗教迫害事情』では「廟産興学」との言葉を紹介しております。扱っている時期は昭和3年(1928年)から昭和6年(1931年)にかけてということで、ほぼ同時代です。もちろん草宣は宗教者ですから、宗教迫害に関心があったのだと思います。草宣はこの直前に東亜同文書院に外務省から支那研修員として派遣されています。東亜同文書院は、ご存知のように大旅行という、実際に中国やアジア各地を毎年周る事業を行っております。ですから、大旅行に草宣本人が参加しなくても、現地の状況について様々な関心を持つようになったのではないかと、東亜同文書院の教育との関連について関心を持ちました。

それから水野梅暁さんについては、80年代に水野梅暁の文章が目された時に研究報告会が開かれたのですが、私はまだその報告を見ておりま

せん。これは今でも私の宿題となっております。それにまつわるお話を伺っておりますと、水野梅暁と東亜同文会のネットワークについては、やはり注目すべきではないかと思えます。例えば亡くなられた中村義先生の水野梅暁関係史料調査に関連して、日中両国の著名人がずらりと登場した写真があります。その中で私が今ざっと見ただけで、今から申し上げる人物は東亜同文会関係者ですね。犬養毅、宮崎滔天、頭山滿、それから近衛文麿、また根津一は東亜同文会の幹事長も務めていますし、東亜同文書院の初代院長となります。さらに、川島浪速、萱野長知、内藤湖南。

また、東亜同文会は実は日中両国でも教育をやっております、1899年から1922年にかけて、東京に東京同文書院という中国人留学生のための学校を設けています。そこにやって来たのが陸宗輿ですね。陸宗輿は、根津一さんの下に出ています。五四運動の時の売国三官僚として、学生達から批判されます。陸宗輿は東京同文書院から早稲田に行き、後に外交官になりました。21か条条約の時に外交官として日本との交渉にあたったために学生たちに攻撃されたのです。東京同文書院では、ベトナム人留学生を受け入れています。有名なファン・ボイ・チャウ(潘佩珠)がドンズー(東遊)運動で派遣した留学生を受け入れています。これと関係する柏原文太郎(1869~1936)の墓が、成田山新勝寺にあること私も存じ上げております。柏原文太郎は、ベトナム人独立運動家を東京同文書院に受け入れた時の副院長でありまして、柏原がキーパーソンの役割を演じています。そういうところからも、東亜同文会ネットワークが水野梅暁との間を結ぶ一つのくくりとして設定できるのではないかと思います。但し、東亜同文会には確固とした対中国革命の方針があったわけではありません。例えば辛亥革命より前ですと、近衛篤麿は清朝の立憲改革を支持しているのですが、周辺の中は孫文の革命運動を支持しています。1910年、辛亥革命の前年でも同文会としては立憲改革を支持しています。但し、ネットワークとしての東亜同文会は春、秋2回、総会を開きますが、そこにみなが集まっています。そこでは幹事長から1年あるいは半年間の活動報告があり、今後の方針が提示されます。

東亜同文会が最も力を入れたのが教育でありまして、上海の東亜同文書院は1901年にできた日本人学校ですが、東京同文書院が辛亥革命の前ま

では中国人留学生が、ご存知の通り、大変たくさん来ています。ところが、それが21か条条約の1915年、21か条条約破棄要求と山東への主権回復が入れられなかったヴェルサイユ会議に対しての1919年の五四運動を経て激減したものですから、上海の東亜同文書院に中華学生部を設けました。要するに東亜同文会の教育は二本立てであり、日本人学生と中国人学生と両方に向けてやっていました。東亜同文会のネットワークには水野梅曉さんのネットワークがかなり入ると思います。今回のワークショップの共催団体である東亜同文書院大学記念センターのプロジェクトでも、是非この東亜同文会のネットワークについて研究会の中で位置付けられるとありがたいと思っております。水野梅曉だけを見ていると、個別には出てくるのですが、東亜同文会のくくり方を入れると、水野梅曉の交友関係をかなり絞り込めるのではないかと感じております。

三好：それでは高木さん、お願い致します。

高木 備太郎：ご存知の方にお伺いしたいことがございます。この3月までにある原稿書なくてははいけないんですけど、『名古屋市史』の戦時中に関して編纂の調査員をやっております、その解説を書かなければなりません。具体的には、昭和16年に当時の汪政権下の南京市から名古屋市に千手観音が送られたことについてです。今、名古屋の平和公園にある平和堂の中に安置、というか放置されているわけですけど。それに関する戦時中の史料がありまして、名古屋市が作った『千手観音光来記』（日華親善千手観音慶讃会、1942年）という冊子です。そこには、当時の名古屋市長（縣 忍、1881～1942、名古屋市仏教会長）が代表となり、名古屋の経済界と愛知県、名古屋仏教会とが責任を持って名古屋市民を総動員し、日泰寺まで運んで入れたということが記されています。問題は、これが極めて政治的な側面を持った動きであるということです。事は、名古屋の東山にあった東山観音というある個人で建立した十一面観音を南京に贈ったことに始まります。その返礼として南京市から日本の仏教徒に向けて、千手観音を名古屋に安置するというで頂いたというわけです。この最初の仕掛け人はいったい誰なのでしょう。最初に十一面観音を南京市へ送り

ましようという話では、色々な人が動きますが、今のところ私がキーパーソンかなと思っているのは足立松陽という、『名古屋新聞』(現、『中日新聞』)南京支局の記者(囑託)です。どうもお坊さんの出であるらしく、仏教会関係でも名前が出てきます。その後日本の仏教会の代表から日暹寺(現、日泰寺)からと、いろいろな方の名前が出てくるんです。それでは、仕掛けの最初は一体どういう動きだったのか、が気になります。今日のお話で直接お伺いしたかったのは、水野梅曉なり、藤井宣丸さんのお父様である草宣さんがその話にどのように関わったのかという、つまり昭和16年に南京から名古屋へ千手観音をお移しするやりとりはどう関わったということです。それについて、お話を伺っていらっしゃるかどうか、あるいは、全く話の筋が違って正反対のお考えをお持ちだったのか。そのあたりをお伺いしたいと思います。藤井宣丸さんは名古屋には南京からの千手観音があることは当然ご存知だったと思いますが、これについてお父様は何かおっしゃってましたか。

藤井: おそらく『中外日報』などに報告というか記事的な文章を親父が書いて出した、ということは聞いております。これについては大東君、あなたのほうがよく知ってんじゃないの。

三好: 大東さん、お願いします。

大東仁: 南京の観音様については、私よりも私の知り合いがきちんと調べてると思います。漫画なんですけど、『海を渡った二つの観音様』(森哲郎著、鳥影社、2002年10月)という本があります。私の友人が十数年前から地元の『名古屋新聞』なども含めて調査、研究しております。それは漫画だということでもバカにしないでほしいんですけども。それが今、この件に関して多分最先端だと思っております。是非お買い上げいただきますよう。

三好: 『海を渡った二つの観音様』というタイトルですね。漫画は視覚に訴えますから、きちんと事実即した表現でないとい目瞭然、きちんと調べてから、描くことになります。かえって文献資料に依拠している我々の

ほうが、文字であることに容易に騙されている、ということがあります。

ありがとうございます。ところで、これは新しい問題なんです、十一面観音の南京贈呈に関わったのは名古屋コーチンで有名な三和でしたね。

高木：三和の伊藤和四五郎さん。

三好：三和の伊藤和四五郎さんが関わった十一面観音が南京に渡って、南京では戦時中きちんと祀られていたことは確認しています。日本の支那派遣軍も大事にしていたのですが、その後のこと、特に戦後のことは全く分かりません。この件について湯原さん、いかがでしょうか。

湯原健一：今日、史料の整理について報告するはずだったのですが、ちょっとできませんでした。ワークショップの初めに、三好先生がある軍人の日記を読んでいるということをおっしゃられました。私も先生と一緒に読んでいまして、確か私の読んでいた担当の部分だと思うんですけども。支那派遣軍の中で名古屋からの十一面観音をどのように受け入れるかということの議論が、その日記にメモとして残されています。私もその時は、その観音様が名古屋とどのように関係しているのか思い至らず、日記に注をつけていく段階でそれが分かり、さらにその観音様が現在は平和公園にあるということを知りました。名古屋からの渡っていった観音様は、戦後は南京市に一応残っていたことは残っていたらしいのですが、どうも60年代後半から70年代前半の文革の時に、紅衛兵が十一面観音像を破壊し、焼却してしまい、現存していないとのこと。戦時中、支那派遣軍は受け入れる側としての環境整備はしたのですが、派遣軍のなかの誰がそこに一番拘わったのかについては、その日記の記述ではちょっと窺い知ることはできません。

三好：ありがとうございます。この南京の毘盧寺に収められた十一面観音と、同じく南京の玄奘寺にある三蔵法師のお骨とがどのように絡んでくるのか、あるいはこないのか全く分かりません。絡んでくるとなると、話の重要性が増すのですが、今のところは何とも申し上げようがないというの

が実情です。

では菊池さん、お願いします。

菊池一隆：愛知学院大の菊池と申します。一つだけ質問いたします。私も日中戦争を研究していますが、質問したいのは、先ほど藤井先生のお話にあった孤児問題です。中国の華北戦線、あるいは華中戦線で発生した大量の孤児を、大阪など各地の色々な寺が育てたり、保育するために連れて来ています。中国からは、保母も連れて来たりしています。その孤児たちは、結局のところあまり設備が整ってないこともあって、強制送還されたりもしましたが、四天王寺などでは、孤児を大変大事にしたということです。そうすると、それら孤児らが具体的にどのように生活していたのか、さらに水野梅暁がもしもそういう孤児問題と関係しているならば、それら点について是非ともお聞きしたいと考えています。

藤井：正直申し上げて、私、父親から聞いた範囲内では当時日本に来た孤児たちが中国へ帰っていったことについては、そのことを伏せておいたとのこと。日本の「強制」によって帰ったのかどうか、それは分かりませんが。それに対して父親が残念がっていた、それぐらいしか私の記憶の中にはありません。

菊池：四天王寺も、やはりかなりやっていたんでしょうか。

藤井：四天王寺のご住職と父親とは、当時付き合いがありましたので、それは考えてみれば北京で覚生女学校（北京覚生女子中学⁽²³⁾）を作ったのは日本人の子女のためじゃなくて、もともとは中国人子女のためだったのですが、戦争の混乱の中で在留邦人の子女の方が多く入ってしまっていて、中国人のほうが少なくなっていたとのこと。こういう点から、教育機関を教化の先兵に使うということとは違いますから、「これは、大変難しい話だな」ということはよく漏らしておりました。覚生女学校も東本願寺法主

(23) 王娟「戦時下北京における覚生女子中学校：北京市檔案館資料を中心に」(『中国研究月報』第66巻第8号、2012年8月) pp.16-29。

夫人大谷智子さんのご寄進で出来たわけです。それで、戦後、昭和30年代初め、私が初めて北京へ行った時、覚生女学校の跡を見せて欲しいと言ったんですけども、全く案内してくれませんでした。これはまあ当然なことで、私を連れて行って下さった方々にも、「わたらの行動は全て中国の公安が見ているから、あまり私的なことを要求するな」と言われて、結局覚生女学校は見ずじまいでした。4、5年ほど前に北京に行ったら、もう北京オリンピックの時にきれいに取り壊されてしまったということで、おそらくこの辺だろうということしか分からず、帰ってきたこともございます。孤児の話については、それとは少し外れるかも知れませんが、父親がちよっと愚痴っぽく言っておりましたことを記憶しております。当時日本へ来たことのある中国の人たちは、帰国した後は日本へ行っておったということを逆に伏せております。戦時中、私の寺には父親が日本への留学生を連れてきておまして、夏休みになれば5、6人くらいはいつも寺にごろごろしておりました。私なんか小学生ですから、風呂へ一緒に入ったりしましたけれども。そういう付き合いと、先ほどおっしゃられた四天王寺さんが孤児を引き取って、預かっておられたというのは、ちよっと意味が違うかもしれません。「四天王寺さんでも苦労したんだけど、甲斐がなかった」という表現で受け取っていいのではないかと、思っておりますけど。申し訳ありません。

三好：ありがとうございます。それではもう6時過ぎましたので、最後に国際問題研究所の所長であり、東亜同文書院センターのセンター長でもあります馬場よりご挨拶を申し上げます。

馬場：本日のワークショップそのものは、大変地道な史料調査を基にして、それをどう活かすかという話に繋げていくことですから、そうした研究を是非やりたいと様々な刺激を得られたというのが私の率直な感想です。

愛知大学国際問題研究所には研究テーマが3つあります。国際関係と国際機構と欧米、アジアを含めた地域研究、中心は中国研究になるのですが、それ以外も含めた各地域の研究。現在、4つのプロジェクトが動いています。その各プロジェクトが、それぞれ1回は最低ワークショップなり、研

研究会なりをやってもらって、共同研究を実のあるものにしてほしいという方針です。その意味では、今回のワークショップは、非常に実のあるものであったと思います。

東亜同文書院大学記念センターは豊橋にあり、常設展示として孫文を支援した山田良政と山田純三郎の兄弟、東亜同文書院、それから愛知大学創立初期、この3つを柱として常設展示をしております。資料は豊橋の大学図書館に入っています。東亜同文会の後身にあたる霞山会が東京で所蔵していた資料です。それらは、霞山文庫という名前の特別文庫として、豊橋図書館内にコーナーを設けております。もし機会がありましたら、そちらをご覧くださいと思います。

さて、東亜同文書院が上海から帰って来る時に国民政府は、あらゆるものの持ち出しを禁じました。それにも拘わらず、最後の学長であった本間喜一は、学籍簿と成績簿を学生たちに密かに持ち出させました。それは、学業途中で東亜同文書院が廃学になりますので、日本の他の大学に転学する時に必要だったからです。霞山会の資料は、東京の東亜同文会に於てGHQによって接収される前に、学生たちが皆で手分けして密かに持ち出したものです。1930年代当時の中国関係の雑誌や本の原本が、かなりあります。もう一つの特徴ある展示は「大旅行」についてです。東亜同文書院で卒業旅行として実施した「大旅行」の記録が現存しており、一部はすでに印刷されたり、マイクロフィルム化されたりして公開されております。

最後に、今日ご報告して下さいました先生方、鳥居観音関係の皆様、水野明様、山本峰子様、わざわざ名古屋までお運び頂きまして、感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

三好：ありがとうございました。

以上をもちまして、ワークショップ「浄圓寺、鳥居観音史料から見える近代日中関係」を終了したいと思います。長時間ありがとうございました。

※この「記録」は当日の発言のテープをおこし、文章を三好章が整理したものである。なお、ワークショップには一橋大学准教授(当時)佐藤仁史氏、南山大学講師(当時)宮原佳昭氏も参加され、プログラムに従ったご報告を

ワークショップ「浄園寺・鳥居観音史料から見る近代日中関係」

なされたが、お二人からの強いご要望で、発言は収録しなかった。読者諸氏の御諒解を願うものである。